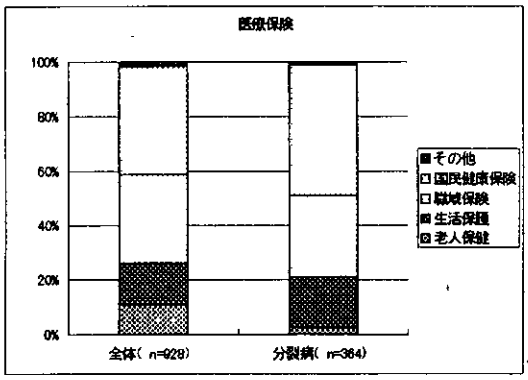
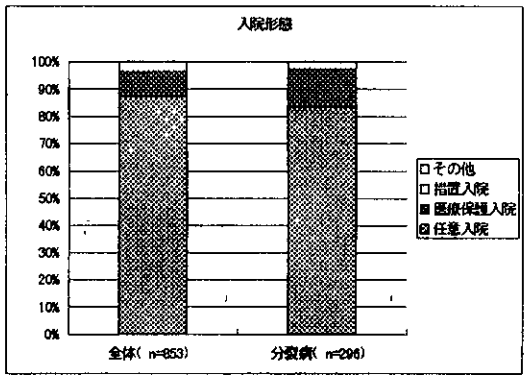
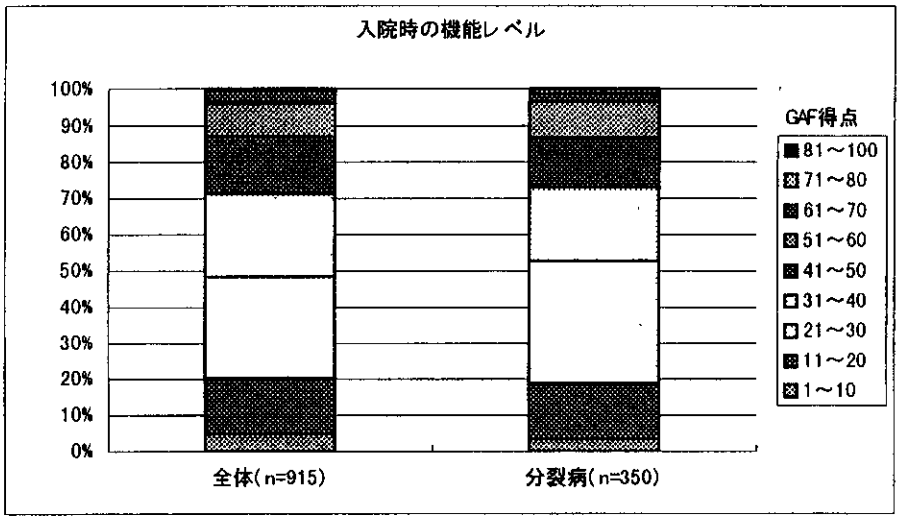
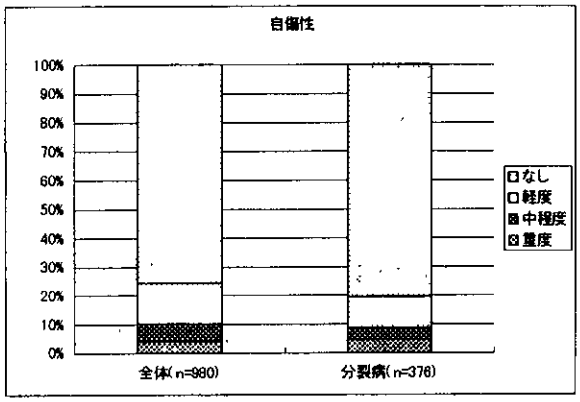
いた。

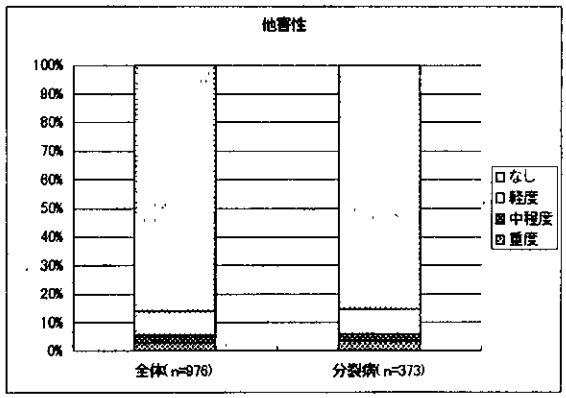
以下に主な項目ごとの全体と精神分裂病患者との比較を図に示す。











(5) 身体合併症の有無についての分析

984 名の対象者の性別は、男性が 460 人(46.7%)で、女性が 524 人(53.3%)であった。平均年齢（標準偏差）は 52.5（19.9）歳であり、65 歳以上の患者は、303 人（30.8%）であった。身体合併症を有する患者は 442 人（44.9%）であった。

身体合併症を有する患者は高齢である割合が有意に高く、65 歳以上のしめる割合は、身体合併症を有する患者の 74.9%（227 名）であるのに対し、身体合併症のない患者の 31.1%（210 名）であった（$\chi^2 = 161.0, df = 1, p < .0001$）。

身体合併症の有無による精神医学的診断によると、身体合併症のある患者数（%）は、症状性を含む器質性精神障害は 148（33.5%）で、精神作用物質による精神障害は 49(11.1%)で、精神分裂病は 111（25.1）で、気分障害は 74（16.7）で、神経症性ストレス関連性および身体表現性障害は 20（4.5）で、その他は 40（9.1）であった。身体合併症のない患者数（%）は、器質性精神障害は 31（5.7%）で、精神作用物質による精神障害は 35(6.5%)で、精神分裂病は 256（47.2）で、気分障害は 127（23.4）で、神経症性ストレス関連性および身体表現性障害は 40（7.4）で、その他は 53（9.8）であり、有意に割合が異なっていた（$\chi^2 = 149.9, df = 5, p < .0001$）。

機能の全般的評定（DSM-IV）の平均値（標準偏差, n）では、身体合併症のある患者は 31.4（15.1, 380）で身体合併症のない患者の 36.4（14.5, 504）より、有意に低い値となっていた（$t = 5.0, df = 882, p < .0001$）。